

発達特性と不登校

兵庫県立尼崎総合医療センター
小児科医長 石原 剛広

1 はじめに

- ・発達障害の診断を受けていない子どもたちの中には、発達障害の特性を有する場合があります。診断を受けていないので気づかれにくいですが、その特性によって困っている子どもたちがたくさんいます。
- ・不登校は二次障害である。目に見える形で出てきた時には本人はとても困っている状況である。
- ・少し特性があり、困っている子どもたちに早めに気づき居場所を作ることが大事である。居場所は「人（理解者）」でも良い。その子の居場所がどこにあるのか、居場所となる人がどこにいるのかを見極めることが大切になる。
- ・学校ですべて完結しようとするのはなかなか難しい。横の連携（療育先、相談員、放課後等デイサービス、フリースクール、地域等との連携）や縦の連携（学校間の連携）、そして縦と横をつないでいくことがとても大事になる。

2 発達特性とは

（1）偉人と発達特性

- ・偉人とされている人には発達特性がある人がいる。マイルールが厳格、人と関わるのが苦手等、様子は様々である。

（2）神経発達症群/神経発達障害群（DSM-5）

- ・大きく6つのカテゴリーがあり、これらはオーバーラップしている。
- ・発達特性があり、さらに何らかの環境の変化があって心身のバランスが崩れて適応障害になることは二次障害である。発達障害の場合は不登校が二次障害と言える。
- ・発達特性があるということは強みがあるということである。不登校になった原因を分析し対応していくことで、その子の強みを伸ばしていくにはどのような方法が一番良いのか、自立していくにはどうしたらいいのかを考えることを外来の主旨にしている。

①ADHD（注意欠陥・多動性障害）

- ・ADHDは不注意と多動の二つの概念をもっている。
- ・集中できない反面、興味があることはよく覚える。聴覚が弱い傾向がある。
- ・ADHDの子の子育てで大事なことは、否定をせずありのままを認めることだと思う。叱られて当然のことをした場合、行動のみを注意し、人格は否定しない。
- ・認められてきた子は様々なアイデアを思いついて行動し失敗しても明るく前向きである。
- ・自尊感情が下がると「自分なんてどうせダメな人間だ」「人の評価なんてどうでもいい」等の気持ちから、非行や触法行為、依存症等が出てくる。ある種の自傷行為とも言える。

②ASD（自閉スペクトラム症）

ア 社会的コミュニケーション障害（コミュ障）

- ・自分の考えや価値観から物事を考える癖があり周囲とのずれが各年齢において出てくる。

- ・目に見えないコミュニケーションがわからず、場の状況や空気が読めないのが、人と少しずれた行動をしたり、言葉を発したりする。そうすると仲間に入れなかったり嫌な思いをしたりして、「学校ってしんどいね」「人間関係に疲れちゃった」と思ってしまう。
- ・先生が困っているか尋ねても「困ってない」と言う。困っていても話せなかったり、困っていることを自覚してなかったりする場合がある。
- ・子どもたちは情報を言葉だけではなく、顔色、歩き方、目線のうつし方、表情、言葉かけをした時の緊張感や反応からも出しているため、言葉以外の情報も読み取ってほしい。

イ マイペース・マイルール・マイワールド

- ・ASDの子どもはマイルールが強い一方で、社会のルール、学校、環境、家庭環境、自分自身（生身の自分）を受け入れがたいと感じている。
- ・社会や他者のルールをどう落とし込んでいくのが課題である。それをクリアしていかないと、自立していくことや、場所を見つけていくことを選択肢がどんどん少なくなっていく。なるべく人のルールとの折り合いをつける練習をしていく必要がある。
- ・折り合いをつけていく練習の場として学校が機能するわけであるが、学校がしんどくなったら、場所を変えて経験値を増やしていくとよい。

ウ かんしゃくと強化

- ・自分のペースが乱されるとかんしゃくを起こす。かんしゃくは発達の特徴の大事な部分で、それ自体は悪いことではない。
- ・かんしゃくをしたら自分の思い通りにすることができたという、ある種の誤学習をしてしまうと、かんしゃくは直らない。
- ・対応の1つとして「計画的無視（褒めるために待つ）」がある。かんしゃくを起こしたときに、かんしゃく自体は怒らずに安全な場所でさせておいて、自力で落ち着くのを待つ。落ち着いた時を見計らって「落ち着いたね」「自分で何とかできたから、それでいいよ」と伝える。我慢できたことを褒めることで、セルフコントロールを学ばせることができる。何年もかけて自分のことをコントロールし、我慢できる自分を創っていくことが大事である。

(3) HSC/HSPは発達障害なのか

- ・一番大事なキーワードである。不登校の保護者の方はほぼ100パーセント知っている。
- ・定義上、発達障害ではない。
- ・とても繊細なため、人との付き合いにおいて考えすぎてしまう。記憶力がよく、過去との矛盾をすぐに見つけてしまって人間関係で疲れてしまう。人によって違うが敏感な体質がある。女性に多い。
- ・女の子はもともと対人のつまずきは比較的少なく、協調性を持っており心の理論が備わっている。集団生活はある程度やり過ごせるが、適応しようと思って頑張り続けるので、先生方からは困っているのは見えない。その子の中で限界に達したときに、不登校になる。女の子の不登校のパターンには、ある日突然という場合がある。

(4) ギフテッド

- ・ギフテッドとは生まれつき高い能力をもつ人たちのことである。
- ・「浮きこぼれ」という言葉がある。落ちこぼれの逆で、能力が高いのに学校に行けなくなったり、勉強ができなくなったりして自尊感情が下がってしまう。
- ・単純にIQだけでは測れないが、一つの物差しとしてIQがある。中央値が100で、知能に関しては、130を超えるとギフテッドである。

- ・優等生とギフテッドの違いとして、優等生は話をきちんと聞いて実行し、想定内のことをきっちりこなす。ギフテッドの子は先生の言うことを聞かずに、ただただ没頭して想定外のことを創り出していく。複雑な脳の子もいて、いわゆる問題行動につながる場合がある。
- ・能力が高いが苦勞している子もいて、自分がギフテッドであることに気づいていない事もある。
- ・発達特性とギフテッドの両方の問題を持つのが2E（2重の例外）である。1学年、学校単位では必ずいる。

3 二次障害の臨床

(1) 個人因子×環境因子

- ・個人因子と環境因子の掛け合わせで二次障害が起こる。
- ・個人因子は、その子が持っているベースの部分である。発達の度合い、性格、知能、運動能力など様々である。
- ・環境因子は、家庭や学校の先生である。社会の入り口なので先生方の立つポジションは非常に重要である。
- ・個人因子が非常に濃厚な子も、周りの大人や家庭の理解があれば二次障害なく生活していける。逆に、発達の特性があまりなくても、理解されなかったり、嫌な経験が重なったりすると、不登校から気分障害等に発展してしまうことがある。
- ・子どもたちは環境に影響を受けて困っていく。困っている子について、家庭環境、学校の環境、先生方の関わりはどうかを分析して、変えられるものは変えていく。
- ・学校に登校することが難しい場合は、地域のフリースクールや、教育支援センター、放課後等デイサービス等につなぎ、学校は一步引いて連携をして情報を集めながら、今後の見立てをして関わってっていくことが大事である。
- ・環境を変え、学校と違う場に行くと、子どもたちはすっきり元気になることがある。それは子どもが病気だからではなく、子どもが環境の影響を受けてしまっているからである。そのため、環境が変わったら元気になる。
- ・子どもには回復力がある。環境調整はとても大事である。「学校だけで何とかしよう」ではなく、少し視点を広げて、その子に合わせた支援がどこにあるのか、地域にどんなリソースがあるのかをみていくことが大事である。

(2) 二次障害への対応の課題

- ・健診等で指摘を受け、早い段階で療育等とつながったり、家族の理解を得られたりする子は、早い段階で環境を整えたり変えたりしていくことで、二次障害を予防していく取り組みができる。しかし、健診で指摘を受けない人たちは、それらの手立てがないまま成長していく。
- ・1つ目の課題は、取りこぼしである。病院に行ったが起立性調節障害と診断を受けただけというような子の場合、発達特性が隠れているケースが多い。
- ・2つ目の課題は、横の連携（療育先、相談員、放課後等デイサービス、フリースクール、地域等との連携）と縦の連携（学校間の連携）をつなぐことである。
- ・縦の連携では、その子が数年後どうなったかということフィードバックするべきである。先生が卒園後や学校卒業後の子どもの姿をイメージできるようになることで、「このタイプは、こういう感じでこういう時に困るかもしれないけど、最終的にはこうなるよね」等

と長い目で捉えられ、極端な言葉かけや支援につながらなくていいと思う。

①身体症状と不登校

- ・起立性調節障害と不登校のセットが多い。過敏性腸症候群と診断される場合もある。
- ・起立性調節障害と診断され、服薬をしても改善をせず学校に行けない子が増えている。原因を突き詰めていくと、「学校（が原因）かなあ」となる。服薬をしても学校生活は変わらないので、結局しんどいままになってしまう。

②愛着障害

- ・外在性と内在性がある。
- ・外在性は発達特性がある子が、育つ環境の中で非行傾向や問題行動が出てきて、最終的に刑法に触れることをしてしまう。
- ・内在性は内面の方に向き、傷つきが重なっていく。PTSD や解離性障害になっていく。

③PTSD

- ・家庭内での虐待、いじめ、性被害等により PTSD になっていくケースがある。トラウマケアが必要な場合は、心のケアセンター等の専門家につなぐようにする。

④解離性障害

- ・解離性障害は思春期の問題としてよくある。解離は、ストレスに対する対応法である。目の前にあるストレスに対し、自分が経験したり感じたりしないようにする心の動きである。記憶をとばす、感覚がなくなる、幻視等様々な症状がある。このような子の中から、不登校になったり自傷行為を繰り返してしまったりしてどんどんしんどくなっていく子がいる。

4 医教連携からみえる臨床

- ・アレルギーやI型糖尿病等、基礎疾患がある子は既に医教連携が行われている。
- ・いくつかの学校で児童生徒向けの授業が始まっている。子どもたちの反応は率直な意見が多く、発達障害を発達障害とっていない。
- ・多様性の場を育むことを大事にしている。陰キャ、陽キャでわかりやすく説明したり、「人と違って全然いいんだよ」「人は人、自分は自分だよ」「そのまま突き抜けていったらすごいんだよ」「得意不得意は誰でもあるけど自分のペースでやっていってね」というような話をしている。

5 最後に

- ・**スキル×マインド** スキル（知識・技能）も大事だが、マインドがとても大事である。まずは、関係性をつなぐことが大事だと思う。
- ・「障害」ではなく「特性」が大前提である。「人と違うのが良いんじゃないの」ということで、自己理解をしていけば良い。そして、人と環境をマッチングしていくことがとても大事である。
- ・何より特性がある子には強みがある子が非常に多いので、その強みを生かしていくことがとても大事だと思う。そうすることで、自尊感情が高まる。